

マセッションの1つである「人口集中する大都市圏の人口移動と単身世帯化—新宿区の人口・世帯動態と増加する壮年単身者の実態—」では新宿区の人口や世帯に関連する報告、自由報告セッションの「結婚」や「不妊と生殖補助医療」などでは人口再生産と関連する報告が行われた。

当研究所からも3件の報告があった。報告者とタイトルは下記の通りである。

釜野さおり「同性愛（者）に対する意識とジェンダー・家族に関する意識との関連性—2015年全国調査データを用いた分析—」

中村真理子・余田翔平「ライフコースをめぐる未婚女性の意識—「理想」と「予想」のギャップ—」

山内昌和「東京大都市圏に居住する夫婦の最終的な子ども数はなぜ少ないのか—第4回・第5回全国家庭動向調査を用いた人口学的検討—」

(山内昌和 記)

## 2016年ヨーロッパ歴史人口会議

2016年9月21日から24日までの4日間、ベルギー、ブリュッセル近郊のルーヴァンに所在するルーヴァン大学 (Leuven University) において、ヨーロッパ歴史人口会議 (2016 Conference of the European Society of Historical Demography) が開催された。これはヨーロッパ歴史人口学会 (the European Society of Historical Demography) の主催であり、2014年イタリア、サルデーニャ島アルゲーロでの第1回会議に続く2回目の会議である。また開催国ベルギーは日本との友好150周年記念の年にあたることから、会議ではオープニングのセッションにおいて「極東に学ぶ：日本」と題したシンポジウムが行われ、日本から参加した黒須里美麗澤大学教授、津谷典子慶應義塾大学教授、金子隆一当研究所副所長による報告とルーヴァン大学ウィリー・ヴァンデウォール (Willy Vande Walle) 教授との討論が行われた。これに続く3日間は、全体テーマを「革新のなかの歴史人口学：世界とヨーロッパ (Innovating historical demography: the world and Europe)」と銘打ち、41の個別テーマセッションと4つの全体セッションにおいて各国の研究者から最新の研究成果報告がなされるとともに、活発な議論が行われた。その内容は従来の歴史人口的方法論 (家族還元法など) に基づく研究成果から、事象歴分析の最新技術の応用による研究成果紹介まで幅広く、とりわけライフイベントの歴史的变化の解釈に対する進化生物学的視点の導入といったテーマを全体セッションで討議するなど、歴史人口学の刷新への機運を感じさせる会議となった。なお、本会議をホストし、日本に関するセッションを企画したルーヴァン大学社会学研究センター (Center for Sociological Research) のコーン・マッシューズ (Koen Matthijs) 教授、松尾英子博士にはご尽力に対してこの場を借りて感謝申し上げたい。会議の詳細はウェブページを参照のこと (<http://eshd2016.eshd.eu/>)。

(金子隆一 記)

## 2016年日本地理学会秋季学術大会

2016年日本地理学会秋季学術大会が2016年9月30～10月2日 (2日は巡検のみ) に東北大学川内北キャンパス (宮城県仙台市) において開催された。一般発表114件、ポスター発表46件のほか、4つのシンポジウムで21件の発表があり、その他に地理教育に関する公開講座「ESDと地理教育の未来」、6回目となった高校生ポスターセッション (20件の報告) も実施された。地域人口に関する報告も多